ほない歴史通信
第２号
1997,3,1

［新聞にみる人物像］

宮田篤三郎について

「いはらき」新聞を読んでいると、昭和五六年一二月一八日の「いはらき春秋」に次のような記事がのっていました。

元県議だった宮田篤三郎氏が亡くなった。90歳（明治二四年三月一〇日初原生まれ）。文字通り天寿を全うした生涯だった。現代の若者に、この宮田氏の人となりを語っても知る人はあまりいまい。だが、県北の四十代以上の人で宮田氏の名を知らぬ人もまたいない。それほど県政界、とくに保内郷での存在は大きかった。

若いころから政治の場で活躍し、戦前、県議会議員や旧上小川村長として、厳しい社会情勢のなか、よく地域をまとめ、戦後の混乱期も一時期を除いて村長職をずっとつとめた。とくに印象深いのは、昭和三〇年の町村合併である。当時、保内郷には一町九カ村がひしめいていた。県は、これを合併させようと地域指導、一時は「旧大子など六町村」「上小川、下小川、諸富野」「生瀬」の三つに話がまとまりかけた。

これに異議を唱えたのが、当時、上小川村長だった宮田氏である。「将来を展望すれば、一町九カ村の大同合併が最良。三分割合併などは将来を見通さぬ近視眼的発想」と言って譲らない。結局は、この宮田氏主張が通り、現在の大子町が誕生した。

死去したのは、一二月九日午前六時十分。告別式は十三日午後一時から頃藤の自宅で執り行なわれました。町内外から三千人が参列し、その有様は、十二月十七日の「新いばらき」に追悼特集として掲載されています。その中の「評伝　宮田篤三郎翁」には次のように述べられています。

大正十二年に上小川村長に初就任した。村政の第一歩は地方農林業の充実と橋、道路の整備改良が先決だとした。・・・昭和三十年の町村合併では、・・・宮田氏は「将来は米国の州制度のように広域行政の時代が来る。大同合併が良い」と根気よく説得、ついに小異を捨て、大同合併に議決を変更させた・・・青年村長、県議時代、昭和のはじめ、水郡線を大宮町から以北に誘致する運動を地域住民の利益と世論を背景に寝食を忘れて尽力した。

私は、新聞によって、宮田篤三郎の政治理念と郷土に対するおもいを知ることができました。

その町村合併から四十二年。高度成長のなかで大子町も大きく変わっていきました。しかし、その中で私たちは生活してきたのです。

なお、「大子町史　資料編　下巻」には、「新聞にみる合併の経緯」として33点の新聞記事が引用されています。新聞記事は、比較的平易で読みやすく、調べやすく、当時の世相を知ることができます。県立歴史館には、明治以来の「いはらき（茨城）」新聞をはじめ、「新いばらき」などを収蔵し、閲覧に供しています。

私は、新聞を読むことにより、その当時の自分にもどれたような気がするし、その当時の時代背景を知ることができました。是非、古い新聞を続けて読むことをすすめます。（野内）

【ふるさと再発見】

一 大鉱山町の誕生と消滅

地域社会を支える産業に永遠不滅なものはありません。時代の変化に翻弄され、様々な形をとって、なんらかの盛衰を経験することになります。大子地方も例外ではなく、例えば馬産がそうですし、産金事業がそうでした。

さて、その産金事業に着目すると、今日では大子地方から全く姿を消してしまったこの産業が、生産の規模でいえば小さかったにしても当地方のあちこちに根付き、一種の産金ブームが起こった時代があります。今から六、七十年前、戦前昭和期のことです。満州事変後の軍需工業拡充、輸入拡大、そして支払い手段としての金の必要性の高まりのなかで、政府は積極的な産金奨励策を展開しますが、それがブームを引き起こす背景でした。この頃当地方で操業が確認できる産金業者は十四人を数えますし、また「いはらき」新聞は、当地方が「一攫千金を夢見る鉱山業者注視の的となつて」いる（昭和十年七月二十七日付）とか、「金銀鉱発掘熱は俄に高まり盛んに発掘願ひが提出されてゐる」（昭和十二年六月十一日付）と報じています。

それら業者の中で一際注目されるのが、北海道硫黄株式会社塩沢鉱業所です。これは、その名の通り、北海道に拠点を置く硫黄生産専門の三井系企業が、断続的ではあれ佐竹氏の時代から金が採掘されてきた当時の上小川村塩沢地区に目を付け、昭和十二年にその頃の鉱業権者長谷川広蔵から鉱業権を買い取って設立した会社です。塩沢地区には関連する諸施設が次々に作られ、従業員も北海道や東京など県外から続々と入山しました。一時は従業員と職員合わせて三百四十人を数えるほどの、この地方では他に例を見ない大規模な事業所が誕生したことになります。農業と山仕事によって支えられていた山間の集落は、一大鉱山町へとにわかに変貌したのです。

その変貌ぶりは、地元の飯田喜一さん、家田市郎さんによると、例えば次のようなことが挙げられます。まず、電気がついたこと。通勤用の山道には、約三十メートル間隔で街灯が設置されました。第二は、鉱夫用、職員用住宅の出現。独身者が居住する二階建、三階建の合宿所が四棟のほか、家族持ちの鉱夫が住む社宅や職員用の社宅が多数建てられました。家田さんは、街灯や鉱山住宅のお陰で「大都会のように見えたね。夜が明けたような感じ」だったと、当時を振り返っています。第三は、銭湯、診療所、食料品や日用品を掛けで買えた配給所、相撲場等々、生活を支える諸施設が整えられたことです。先の住宅やこれら施設は、「返り証」（事業が終わった時には元の持ち主に返す約束）つきで買収された土地に建設され、次第に町が形成されていきました。同時に、町のにぎわいも生まれました。

しかしこの町は、政府の政策変更によりやがて消え去る運命にありました。太平洋戦争が激化するとともに日本は孤立化し、貿易は衰退しますが、これは決済手段としての金の必要性が消えてゆくことを意味しました。昭和十八年四月、政府は金鉱業整備の方針を発表し、特定の金鉱山の他は全て休止または廃止の措置をとりました。時期は断定できませんが、塩沢鉱業所もこの頃閉山となっています。町を構成した諸施設は、コンクリートの基礎を残しただけでそれこそきれいに取り払われたそうです。「火が消えたみてえだよ。今まで町だったのがパッと消えちゃったもの」、とは飯田さんの証言。塩沢地区は、再び静かな山間地へと戻っていきます。今では、苔むしたコンクリートの塊だけが鉱山町のよすがとなっています。

（斎藤）

【ふるさと写真帖】

水郡線の不慮の惨事

水郡線袋田ー大子間、久慈川沿岸の列車転落事故は、昭和十四年八月五日夜に起こり、機関手、機関手助手、機関手見習、乗客合わせて、死者行方不明十八名、負傷者四名を出すという余りにも悲惨な事故でありました。

この日、太平洋上の南鳥島付近に発生した台風は、進路を北北西から北北東に変え、関東地方に接近しておりました。午前九時、水戸測候所は「台風が最も本県に接近するのは、今晩（五日晩）か明朝（六日）ごろ、雨も嵐も相当強くなるので海陸ともに厳重な警戒が必要である。」との予報を発表しました。予報の通り、夜に入ると雨風が激しくなり、久慈川は増水し、水位は三メートルに達しました。

午後九時二分水戸を出発した四両編成の三一七号最終列車は、袋田駅にて二十三分間停車した後、徐行運転をしながら大子駅に向かいました。通称嵐山と呼ばれている付近（現在のトンネル）にさしかかったとき、列車は山腹から崩れ落ちた岩石混じりの土砂によって押し倒され、久慈川に転落するという惨事に遭遇しました。その時の事故現場の様子を七日付読売新聞は「土砂に破壊された落石防止の鉄柵は、五十メートルにわたってへし曲がり、増水三メートルの河中に転落した機関車と前部二両目の客車は、水中深く没し、三両目の客車は、めちゃめちゃに破壊され凄惨な状況を呈している。」と伝えています。

行方不明となった乗客の死体捜索は、大子警察署長指揮のもとに、大子町より下流大宮町に至る久慈川沿岸二十数か町村の警防団員の出動によって夜を徹して行われました。

事故の処理や復旧工事は、水戸保線事務所長総指揮のもとに水戸管内保線工夫、郡山鉄道工場からの保線工夫各百余名、地元大子、袋田警防団員の出動により、六日から七日にかけて昼夜を徹して行われ、七日いっぱいかかって完了しました。その間大子ー袋田間は、六日の午後零時二十七分袋田発の下り列車からバスによる運行となりました。

下小川村の警防団長、村議の小室順太郎は、悲惨な事故が将来再び繰り返されることを憂慮し、今回の列車転落事故を顧み、遭難現場の徹底的な調査をもとにした「山崩れ防止抜本の策」を講じるよう水戸保線、運転両事務所長ほか、国鉄関係当局へ具申をしました。

その後、事故現場には、再び悲惨な事故が起こらないよう地形・地質などの現場調査をもとに、強力な落石防止の鉄柵やトンネルが取りつけられ、列車通過時の安全が保持されています。（小澤）

【文化財散歩】

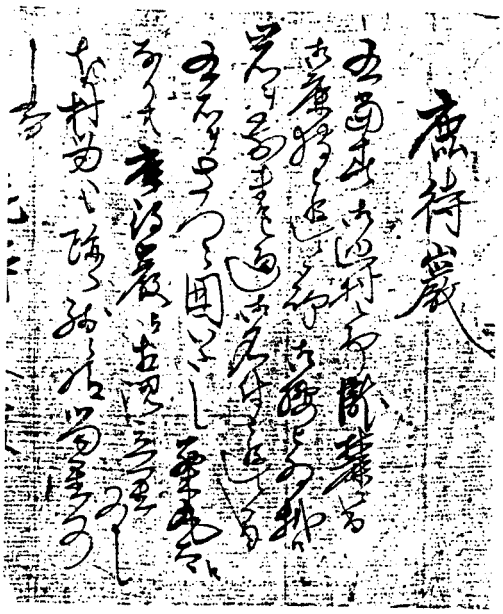
鹿待嚴

平成十年のNHK大河ドラマに江戸幕府第十五代最後の将軍となった『徳川慶喜』が決まり、慶喜が水戸藩第九代藩主徳川斉昭の第七子(七郎麿)であることから、生家である水戸徳川家ゆかりの史跡等の問い合わせが相次いでいる。当地方には慶喜に関する直接の資料はないが、光圀(義公)や斉昭(烈公)に関する史跡は多い。左の史料は袋田・桜岡長良氏所蔵文書で、郡奉行所から袋田村庄屋へ廻状とともに通達された御達しである。

鹿此　待付　巖　右當春　御巡村之節瀧麓ニ而　御鹿狩被遊候御砌　御腰被為掛候岩ヲ前書之通御名付被遊候間　右石ヲさつと囲いたし栗丸太江なり共　鹿待巖与　相認立置可申候

尤村留へも跡々残候様留置可申事

当春すなわち天保五年(一八三四)四月、斉昭は当地方へ巡村した。その折、袋田の瀧にも立寄り、瀧の麓で鹿狩りをした。このとき腰掛けた岩を自ら鹿待巖と名付けたのである。通達文は、この岩にざっと囲みをして、栗の丸太で標柱を立てておくように、また御用留帳へもあとまでこのことが残るように書き留めて置くようにというものである。今日、標柱はないが、この鹿待巖はのこっている。（井上）



【編集後記】

大子地方は、肌寒さを残しながらも梅の蕾がほころび始め、春の風情が少しずつ濃くなっています。お変わりございませんか。「ほない歴史通信」第二号をお届けします。

昨年十二月に創刊号を発行しましたが、試行錯誤のなかでの発行であったにもかかわらず、何人かの方からは暖かい励ましの便りを頂戴致しました。この場を借りて御礼申し上げます。私たちの試みが支持されたことに、いささか安堵しております。これを、今後の本紙編集発行のエネルギーにしたいとも考えています。

さて、本紙の編集発行には、大子町史の編さん事業に長年関わってきた五人の者が当たっていることは前号に記しました。今号から、このグループを「遊史の会」と名付けることに致しました。歴史を普段着の視点でとらえ、歴史の世界に遊ぼう、そして歴史を楽しんじゃいましょう、そんな意図を込めて命名しました。御理解いただければ幸いです。

本号には、「文化財散歩」欄が新たに登場しています。限られたスペースのなかで、できるだけバラエティに富んだおもしろい記事をと心掛けておりますがなかなか思うようには参りません。執筆の輪をひろげ、町内外の方々の御協力を是非得なければ、と考えております。次の号の発行が待ち遠しい、そんな風に期待される情報紙に育てあげられればなあ、と夢見ています。（斎藤）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（元教員）
井上和司（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
TEL　〇二九五七－二－二六二七